

《村瀨文庫》

村瀨文庫について

木村 栄 一

一橋大学附属図書館の五階、つまり四階の入口を入り、さらにそこから鉄のタラップを昇った一番高い所に、〇〇文庫と称する書架がならんでいる。その一つに村瀨文庫というのがある。

村瀨文庫の「村瀨」というのは、もちろん、わが国における保険学の父といわれた村瀨春雄博士のことであるが、この文庫は、〇〇文庫という名称が一般に意味するように、故人の蔵書がそっくりそのまま大学図書館に収められたというものではない。村瀨博士の蔵書（旧村瀨文庫）は関東大震災の時、神田一橋で全部焼失した。現在の村瀨文庫はその後次のような経緯で再建されたものである。

大正十年、博士は療養に専念されるため、学校も会社もその職を退いて御殿場に移転されたが、その際、博士が生涯を挙げて収集された蔵書一切はこれを母校に寄贈する素志で、その保管を大学当局に委嘱された。当時、村瀨先生所蔵の本といえば貴重なものとして学生の間でも噂されていたくらいであったから、学校側は感激し、早速これを分

教場研究室内に収蔵するとともに、その永久保存と学問的利用のために村瀬博士記念研究館の建設を計画した。

大正十一年五月の『如水会々報』は、この記念研究館建設費五万円の募金について同窓生有志の協力を呼びかけているが、大正六年にできた大典記念図書館の建設費が五万円、同八年に落成の如水会館が三十数万円、昭和二年竣工の兼松講堂が五十三万円であったことを思えば、当時の一橋人がいかに真剣に村瀬博士の学徳と功業を讃えようとしていたかがわかる。この計画が着々と進み、全国の同窓生からの応募も次第に増加しつつあったとき、突如として関東大震災が起こり、博士の蔵書はすべて灰じんに帰してしまったのである。さらに関係者を悲しませたのは、これより半年後の大正十三年四月九日、博士も逝去されたことであった。

不慮の天災により記念研究館建設計画の実行は不可能となったが、その時すでに寄せられていた浄財は約二万円にのぼっていた。そこで関係者の間でこの資金の最も適切な処理方法について慎重に検討された結果、醸出者の諒解を得て、これを村瀬文庫の再建にあてることが決定された。

幸い、博士の蔵書のうち、藤本幸太郎教授が最初に整理を手がけられた保険関係図書の見録、「村瀬文庫保険書籍目録」が、大正十二年八月、すなわち、偶然にも大震災直前に完成していたが、そのコピーを当時ヨーロッパの諸国に留学されていた博士の門下生、岩本啓治、加藤由作および椎名幾三郎の三教授に送るなどして焼失した図書の再収集へ懸命の努力が払われた。こうしてできあがったのが今日の村瀬文庫である。

現在、村瀬文庫に属している図書は約二千七百冊で、そのほとんどが洋書である。博士の蔵書は一万冊をはるかに越えていたといわれるが、前記保険書籍目録にのっているのは約二千八百冊であるから、数の上ではほぼ復旧した計算になる。ところで、二千七百冊という数字は、〇〇文庫と名のつくものの中でもとくに多いというほうではない。ただ、村瀬文庫の本は全部が保険に関する文献である。これは前記のように、本文庫が故人のすべての蔵書を取めた

ものではなくして、保険文庫として再建されたためである。

しかし、村瀬文庫を保険文庫としてみた場合でも、その冊数はけっして多くはない。ベルギーのルヴァン大学国際保険文庫の蔵書は約二万三千冊である。外国と比較するまでもない。ドイツ保険学界の経済・法律両部門それぞれの代表的学者であったマーネスおよびエーレンベルヒ両教授の蔵書を購入・所蔵している日本の一保険会社の文庫にさえ及ばない。

村瀬文庫は、保険文庫といっても、主として海上保険に関する文献から成り立っている。それでは、海上保険文庫としての村瀬文庫の価値はどうであろうか。数の点だけからでは、これまた自慢するには値しない。再建当時は別として、それから今日までほとんど補充されていないのだから、これは当然といえは当然で、やむをえない。こう書いてみると、村瀬文庫はあえて特筆するに値しない一文庫にすぎないように思われてくるが、事實はまったく逆である。

私は書庫の階段を五階まで歩いて——エレヴェーターなどという便利なものはない——はじめて村瀬文庫の前に立ったとき、啞然としたものである。その頃図書館ではある本が長期貸出されたときは、その本のあった場所に借出者の名前を書いた木札を立てていたが、そういう木札が村瀬文庫にズラリと並んでいたのである。しかし、木札をよく見ると、そこに書かれていたのは借出者の名前ではなくて、㊦という印であった。私はやがて、図書館では一八五〇年以前に出版された本は貴重書として別の場所に特別に保管されていることを知ったのであるが、その貴重書が村瀬文庫には大量にあるのである。具体的にいうと、一橋大学図書館の全蔵書六九万冊余の中、貴重書は約二千件であるが、その中の一六二件は実に村瀬文庫のものである。

このように村瀬文庫には一八五〇年以前出版の古い本が非常に多いのであるが、一般的にいえば、古い本かならず

しも貴重書ではない。むしろ、古いものは全然役立たない研究分野もあろう。この点、海上保険はきわめて特殊な領域である。海上保険は海を舞台とする国際的商取引であるから、きわめて進歩的であるが、一面においては超保守的な所がある。このことは外国貿易で使用されている英文海上保険証券をみれば、直ちに気づかれるであろう。この保険証券が英国人によっても狂人文書といわれるくらい難解な英語で書かれているのは、それが十四世紀イタリアの保険証券の原形をほとんどそのまま残しているからである。換言すれば、二十世紀の海上保険も、これを根本的に理解するには中世までさかのぼらなければならないのである。それに必要な本が、その本が、村瀬文庫には沢山存在するのである。

たとえば、三年前にその第一五版が発行され、一世紀以上にわたって名著の名をほしのままにしている『アーノルド海上保険』の初版本（一八四八年）もあれば、「保険によって利得してはならない」という不朽の名言を残したストラッカの初版ヴェネチア版（一五六九年）もある。スカッチア（一六一九年）、ヴァラン（一六八一年）、タルガ（一六九二年）、エメリゴン（一七八三年）、パーク（一七八七年）などなど。よくもこれだけの古典が集められたものである。海上保険に関してこれだけの古典を所蔵している所は、わが国にはもちろんないが、外国にもおそらくあるまい。前記のルヴァン国際保険文庫にしても、博士が留学されたアントワープ高等商業の図書館にしても、最近その蔵書目録を公にしたミュンヘン大学保険文庫にしても、この点では村瀬文庫に遠く及ばない。

それでは現在の村瀬文庫は海上保険古典の文庫としてすでに完全なものといえるかという若干ちゅうちょせざるをえない。その所蔵冊数においては焼失前のそれとほぼ同じであるが、旧文庫にあって現在の文庫にないものもかなりある。博士自身、旧文庫が焼けた後加藤由作教授に寄せられた手紙で、「三十五年間の苦心を思へば烏有に帰し候こと如何にも残念にも存、筆写本はもちろんのこと印刷本も絶版物不尠、専門の者には又これを見るの機何れ

の時に来るべきや」と悲嘆しておられた。したがって、再建当時の関係者の並々な努力にもかかわらず、たとえばレアットの『欧州海上保険法史』（二八七〇年）など、重要な本で欠けているものがある。また旧村瀬文庫にもなかったが、今日からみれば海上保険の研究に欠いてはならない文献、たとえば、海上保険に関する世界最初の本、サンテルナの『保険論』（一五五二年）などが抜けている。

もちろん、これらの貴重な古典を今から入手することは非常に困難であろう。しかし通信・情報機関の発達によって原本の入手もかなり容易になっているし、複写技術の進歩によってコピーの入手が可能となってきている。幸い、今回村瀬文庫充実のために多額の金額が寄付される由であるが、私はこの資金は村瀬文庫が持っている海上保険古典文庫としての特色を一層生かす方向に使用されるのが、最も適わしいのではないかと考えている。

もし、このようにして、村瀬文庫が海上保険古典文庫としてより一層充実したならば、その蔵書目録を作成し、これを広く海外の大学にも頒布したらどうであろうか。村瀬文庫の真価はますます世に認められるに至ることである。

〔本稿は『村瀬春雄博士の面影』（村瀬春雄博士記念事業会編）、昭和三十九年発行、に掲載された拙文に若干加筆したものである〕

（一橋大学商学部教授）